
ノー・メモリーズ

ケース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノー・メモリーズ

【Nコード】

N6493H

【作者名】

キース

【あらすじ】

ある時代ある場所の話世界で最も小さな町デエルシティに流れ着いた少年、この少年はなぜ流れてきたのか、自分の事も何一つ分からない。そんな中、村で一つの事件が起こる。それをきっかけに記憶を取り戻すこととなる。

第一章 記憶なき少年

それは、昨日の雨の日の出来事だった

第一章

ザー　ザー　強く雨が降る。

気が付くと、そこは見知らぬ場所であった。

「あ、起きた。」隣から人の声がした。

その隣には、女の人がいた。

「え」と・・・」

その女の人の話によると海に流され倒れていた所を、ここへ運ばれたらしい。そういえば、ここは・・・。

「あの、ここは？」

コン　コン　ちょうど戸を叩く音がした。

「どちら様ですか？」女の人が戸に向かって言った

今はタイミングが悪いため、後にする事にした。

「わしじゃ・・・」戸から、少し声の低い声がする。

「村長・・・。何の用ですか？」不安そうに言う。

「お主が海で人を拾ったと聞いたのでな。様子を見にきた。」その村長が入ってきた。

「お主か、流されてきた人は？」村長が聞く。

「はい。」自分は深く知らないが取りあわず返事をした

「お主にたずねたいことがあつてな。名をなんと言う？」

村長は、当たり前のことを聞いた様な顔をした。

自分の名前を考えると頭がぼつととする。

「わかりません。」と何も考えず口が動いたのだ。

「なにっ・・・」村長は大きな声で驚いた。

「え」女の人にも驚いた。

自分も驚くが、わからない。そこを村長が、

「そうじゃ、そういえば。お主と同じ日に剣が流されて来てな。今は海にあるんじゃないが見に行ってみたらどうじゃ？」

「あの、さつきから思っていたんですけど、ここはどこですか？」

「ここは、ヂエルシティですけど。」

「あと、あなたのなまえは？」

「私の名前は、ライディ・ガルドです。」

「ありがとうございます、ライディさん。誠に勝手なんですけど、付いて来てくれませんか。」

「良いですけど。ちょっと、家の前で待ってもらえますか？」

「その間、村を回っているのはどうですか？よろしければ私が案内しますよ」と村長が言う。

「よろしく願います。」

「それなら、私は海で待っています。」

―数分後―

「ここを右に曲がると海です。」右へ曲がると目の前に薄い青の綺麗な海があった。その海に一人、人がいた。

ライディさんだ。どうやら剣を探しているらしい。

「ライディさん。」と、そつと声をかけた。

「ああ・・・」何か変だ。

目の前を見るとそこには倒れた人がいた。それはひどく傷がたくさんあった。

死体だった

「・・・。行くぞ。」と村長があわてた様子で言う。

「どこにですか？」

「病院と・・・」村長の言葉は途中聞こえなくなった。

―病院―

「どうして？こうなつたろうか？」村長が独りでに独り言をしていた。

「何が、あつたか話してもらおうか。」村長の後から男の人の声がした。

「お主は？」村長が聞く。

「オレか？オレはな。この村の警察みたいな者ですよ。村長。」男の人が偉そうに言った。

「警察の方が何の用ですか？」と不安そうに言う。

「ライディ・ガルドに逮捕状が出たのでね。おい、その名のない少年、容疑者と一緒にいたと聞いた。容疑者がどこにいるか知っているか？」その時、鳥肌がたった

「知らない。」

「知らないだ、・・・くそつ。」警察はその場を立ち去った。

「急いで、警察の者よりも早く見つけて貰えますかな？」とまだ、不安そうに言う。

「わかりました。」

―海―

自分も、不安だった。

何をしなければいいかわからない。

「まず、どうしよう・・・とにかく探そう。」

「んつ。剣がある。」村長の言っていた剣だ。

心を落ち着けて始めることにした。

「たしか、最後にあつたのはここで。ここら辺で倒れて・

。。。今、後ろに。。。気のせいか・・・」

―数分後―

「もうこんな時間だ……。まだ、後ろに何かある。気のせいではない。次は殺気がする。急いで帰ろう。」

しかし、帰ろうとしたその時、後ろから・・・。

―???―

「。。。夢・・・！ 違う現実だ。」

「ここは、どこだ？」

目を開けるとそこには、死体が・・・。

「メガサメタカ・・・」上から声がした。

上には覆面を被った者がいた

声からして男だ。

コン コン ノックの音がした。

男は階段を登った。ここはどうやら地下一階らしい。

しめたチャンスだ。剣を使って、縄を切った。

コツツ コツツ 男が帰ってきた。

「ナニヲシテル？」

「ていつやー！」声をあげて男に攻撃する。

男はかわし、オノを振った。

自分はすき突き、上へ逃げた。

―村長宅―

「村長・・・。」

「！。ライディか？」

―???―

くっ ハッハ

「マテ・・・。」

「待てと言われて誰が待つか」

「ナラ クラエ 煙幕弾」

くそつ、目が・・・登っても、登っても、出口が見えない。

「ぐはっ・・・。」ここはどこなのだ？ くらえ

「ガハッ・・・。」光が見える。そこへ行けば・・・。

「なにっ、次は、閃光弾。」

「ヤッハッハヒツカカタナ。」

――村長宅――

「それでは、失礼します。村長、さようなら。」

「待て、ライディ・・・。」

第二章 ガルドコロシム

第二章

「????」

「目が・・・」けど、見つかってないらしい。

「ヤツメ ドコヘイッタ」

なんでアイツ目が見えるのだ？そういえば・・・。

ガタッ

「ソコカ ナニツ ミガワリダト」

「くらえっ」

ドツカ

「助かった？おとり作戦も伊達ではないね。それにしても

・・・ここどこだ？ヂェルシティならいいんだけどな。村長大丈夫かな？」

―村長宅―

「警察だ失礼する。！！村長何があった？虫の息だ。何している？病院へ行くぞ」警察の前には血まみれの村長が・・・。

ガタッ ガタッ

―病院―

「村長・・・。何があった？」警察は落ち込む。

「手術を始めます。」

「どうか、ご無事で・・・。」

「????」

「とりあえず、上へ行こう」

コッツ コッツ

「コレダケデ クタバルトオモウナヨ」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「寒気がするな。」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「ココハ ウエヘイケバ イクホドデレナクナルカラナ」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「さっきまで、寒気がしていたけど……。熱くなってきたし、酸素が薄くなってきた……。あれっこれっでもしかしてまさかっね……。上に行き過ぎてない？下へ戻る。」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「クックツ ウエカラアシオトガキコエルゼ。」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「あれっ下から足音が。やっぱ気絶だけじゃだめか……。隠れなきゃ。んっ、気のせいかな。足音が二つ？気のせいかな？」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「シタカラモ アシアトガ バシヨココ ガルドコロシウム
ニシテヨカッタカ」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「ここの聖域を汚す者は許さない」
コッツ コッツ

コッツ コッツ

「ヤハリ ガルドコロシウムハ ノロワレテイル」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「上に誰がいるな。しかし、もうすぐで・・・」

コッツ コッツ

コッツ コッツ

「イキドマリダト・・・。ヤツハドコヘイッタ」

コッツ コッツ

「足音が止まった。最上階へ行っただな。」

「誰かいるのですか」

「君は？」

「自分に名前は・・・」

「もしかして・・・。隣町で海から流れてきた人でしょう？」

「・・・隣町？」

コッツ コッツ

「・・・」二人は同時にびっくりする。

「ココニイタカ。！！、ウシロノヤツ・・・。レジスタンスノ
クロウ・ジャツチメント！！」その男がしゃべっている途中に
弓が男に突き刺さった。

「ジェルシテイの人間の2名、殺害容疑で逮捕する。」

第三章 謎

第三章

―病院―

手術から四時間後、手術室の戸が開く。

「・・・」医者は無言で出てきた。

その表情に警察は驚く。

「・・・」警察もつい、無言になっている。

「御愁傷様です」

その言葉に警察は愕然とする。

「所で今朝の新聞を見ましたか？」

「？。なぜですか？」医者は警部に新聞を渡す。

―チエルシティでの殺人者、名の無い少年により、逮捕―

「やってくれるな。俺もがんばるか！」

―ガルドコロシウム前―

「ところで話が変わるんですが・・・」

「なんだい？」

「まず、あなたは誰ですか？そして、ここはどこでガルドコロシウムとはあの男が言っていたので、『ココハ ノロワレテイ ル』って言っていたのはなんですか？あと、隣町って・・・」

「・・・」

「・・・」

クロウの笑い声が周りに広がる。

「最初っからいうね。自分の名はあの男が言っていたとおり、レジスタンスのクロウ・ジャッチメントでクロウでいい。」

「で・・・。クロウさん、レジスタンスって？」

「レジスタンスと言うのは、国に対して逆の意見の者が集団

になったのがレジスタンスなんだ！」

えっーえっー、と自分は頷き話を聞く

「次にこのガルドコロシウムって・・・」

「それはっ・・・」

「？」

「ちよつと、こつちへ来て！」クロウが暗い林の場所へ行き、その場で隠れた。

「どうしたの？」小声でクロウに聞く。

「・・・。つけられている」同じく、小声で言う

「えっ・・・」とその時コロシウム前に男達が五人出てきた。何か話をしているらしい。さっきまで、気が付かなかった。

「アイツは・・・」

「知り合いですか？」

「そんなものなどではない」クロウは背のかばんから紙を出した。その紙を開く。

「これは指名手配の・・・」その時、自分は大声を出してしまった。その声が聞こえたらしく。

「見つけた。追えっ」あの男達が追いかけてきた。

―村長宅―

警察は捜査をしているらしい。

「警部っー」

「なんだっ」

「これが、村長の家の中に。」

「ん。何だ？」警部が聞く。

「日記のようですが・・・。鍵がかかって、開かない様なんですが」

「何が言いたい？」

「その鍵が、番号型の鍵なんです。警部何か聞いていませんか？」

「いや何も聞いてはいない……。待て、そういえば村長が！！死にまぎわに『8275、これで真実を知ることができ』って言っていた」

「まさかつ」二人が同時に言い、鍵の数字を揃える。

「警部っ」

「またかつ、今度は何だ」

「これを……」1つの新聞を警部へ渡す。

「これは……」

「ヂェルシテイ 殺人者脱獄」

「なんだって……」

第四章 自己紹介（前書き）

三章の内容を書き替えたのでご注意ください

第四章 自己紹介

―第四章―

―ガルドコロシウム前―

自分は一目散に、に逃げた。

しかし、敵の数が多いため、男たちにすぐ捕まった。
するとクロウが笑う。続いて男達も笑い始める。

「？」

一人が帽子を取り、

「ぷっ！。何？コイツ、面白い！」男達のメンバーのしゃれた格好をした女が声をかけてきた。

「！」

それに対してメガネをかけた女が

「あつ。ちょっと、レオナ。この人私たちのことを知らないんだよ。急に話しかけると、この人、たぶん混乱するよ！」

「けどさっ、セレナ。クロウが説明しているはずだよ」

「・・・」

辺りが静かになる。

「つまり、クロウが説明していなかったと、いうことだろ

」

「！」

話し合っている女達の後ろから、男の声が聞こえた。

「あなたは？」その男に質問をする。

「私の部下がとんだ失礼を！私の名はスミス・アヌビス
すると、自分の後ろから

「俺の名はレオ・イーベルだ、隣はボルト・ロック」

「よろしく」と、声をかけたが

「・・・」その男から返事がない。

「ごめんね。コイツ、口が聞かないんだ」
すると、後ろから。

「私達も忘れないでよ。私の名前はレオナ・コール」
「私はセレナ・クリフ」

その自己紹介も終わりに首の高そうなスミスが
「何か困った事があったら相談に乗る。だが、今はお前につ
いて考える」

その時ある事が頭を横切った。自分を拾ってくれた老人と
犯人扱いされているライディの事である。その事を聞こうと
、スミスの前に立つ。

「ドォーン ドォーン」

何かが爆発する音が聞こえた。

「ちっ。もうきやがったか」レオが石を蹴り言う。

第5章 旅立ち

―第五章―

―ガルドコロシウム前―

地鳴りと共に地面が揺れる。

「一体、何が？」

「ブレイクだ！」レオが怒り狂ったように言った。

「ブレイク？誰？」

スミスが悲しそうな顔をし、

「ブレイク……。元、俺達と同じレジスタンスで、あの日に人々を殺した伝説の破壊神の1人……。ここまで、この地震は近いな……。」と言いスミスは倒れた。

「……。えっ、あっ、ちょっと」あてはて、してる自分にレオナが、

「避けな！これから、傷を癒すよセレナ」

「うん」どうやら、二人は補助役らしい、けど傷って？

「悩んでいるな！」

「！！！」後ろからボルトが声をかけていた。

「あっ、コイツな、心の中を読む力があって……。」レオが話している途中でボルトが手を自分に当て

「お前は心の回復が必要だ……。老人？ ライディ？ 誰だ？」

「ライディ？ライディ・ガルドか？」クロウが驚き立つ

「知ってるんですか？」

「知ってるも、何も……。さっきも見せたがこの新聞を見てください」クロウに言われるまま新聞を見た。

「さっきは、〝指名手配の所〟を見て驚いたんだろうけど・

・・」

―ヂェルシテイの殺人者脱獄―

「なんだって・・・あんな短時間でどうやって？」

「そう、殺人者を捕まえるために呼んだんだけど・・・。連絡機が壊れて連絡が来なくて、つけられたと思った時隠れちゃって」クロウが頭を下げつつ言う。

「だからあん時・・・」納得した。すると、ボルトが

「でっ、ライディとやらの事と、老人の何が知りたい？」

「隣のヂェルシテイに行けばどうだ？情報がここスタンバイシテイより集まると思うぞ？」

自分は老人を思い出すと息を飲んだ。色々お世話になった恩を返すためにライディを見つけたす！

―村長宅―

「隣町スタンバイシテイに援護をおくれ、頼むぞオガー」

警部が攻撃部隊引き入るオガーに、スタンバイシテイへ行かせた。

「捜索部隊は徹底的に証拠を見つけろそして、マックお前は俺といっしょに村長の家を引き続き調査する。では、散」

「マックちよつと、とれを見てくれ」

「日記ですか？」

「ああ、おまけつきのな」

「なんです？おまけって？」

「鍵だ」

「鍵ですか？番号式みたいですね。番号は・・・」

「番号は知っている。8275だ。中身はまだ見ていない」

「ソコマデダ」この濁った声は殺人者！

「お前は！」

ドカッ ドカッ

―スタンバイシテイ―

「以上で作戦会議を終わる」最後はスミスで締めた。

「おっ、終わったぞ出発準備をしてこいとさ金はレジスタンスが払うつてさ」スミスが寝ていた自分に声を掛けた。

「でっ、なんでレオナがいるの？」

「気にしないの、今あんたの……。ナインの周りで買い物すると全部、なに買ったってレジスタンスが払うから良いじゃない」

「良くない」

「良くなくとは思わないぞ俺は。レオナとこの俺クロウはナインを守る仕事なのにだ」

「セレナはどうした？」

「アイツは、頭が良いからデスクワークなんだよ、それともなに？私がいやなわけ？」

「ちなみにレオとボルトとスミスはブレイクを探しに行ったよ」

地味な二人からの攻撃、レオナは苦手だし……。クロウは……。まあいつか。てか……。

「なんで自分の名前がナインになってるの？疑問はそこからだ！」

「それはね、親父ギャグの名人のロストが「名前がないんだ」とナインの説明したら、「名前はナインだ」と言ったからそこから始まったんだよ」とレオンが言いクロウが

「ちなみに知ってるのは、俺らだけだよ」

買い物だけでもこれは疲れそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6493h/>

ノー・メモリーズ

2010年12月10日17時13分発行